

古文書を読む会学習記録

作成日 平成26年 7月26日

開催日	平成26年 7月24日	時 間	10:00～12:00
場 所	金沢公会堂3号室	出席人数	13名
講 師	真田雅行氏	作成者	伊達一雄
テーマ	第二学習 江戸時代の絵嶋生嶋事件⑦		
概 要	<p>寛保元年(1741)4月10日、絵嶋が61歳の生涯を終えた。高遠に配流されて27年、永遠流とはいえ、赦免も実現しないまま寂しい最後だった。</p> <p>『絵嶋御預ヶ記』より、絵嶋の最後の様子と、その後の検視を巡る高遠藩と江戸幕府とのやりとりを読む。</p> <p>絵嶋は去年2月頃より体調が悪かったが、薬を服用し快方に向かっていた。しかし、去る2日頃から悪寒や発熱に痰や咳も加わり食事が進まず、7、8日頃から絶食の状態だった。その最後については「絵嶋養生不相叶、去ル十日酉上刻落命候由・・・」と記されている。高遠藩は幕府に病気のことは届けたが、「死去の段はいまだ不及披露」という。大奥で権勢を誇った絵嶋も報告書では「私在所に差置女中絵嶋・・・」と極めてそっけない呼び方である。</p> <p>そして、「絵嶋死骸之儀、塩詰仕、念入差置」と書き、その後の処置について幕府の指示を仰いでいる。亡骸を塩詰という処置が何とも痛ましいが、検使(死)についてのやり取りで、高遠藩は絵嶋について「御預り人ではないので、在所へ置いておくよう言い渡され全てその通りに従ってきた」と述べている。</p> <p>一方、幕府は絵嶋の受取は何年前かと尋ね、高遠藩は、28年前の正徳4年で、その仰渡しの覚書があると差出している。このやり取りを見ただけで、絵嶋生嶋事件がすっかり風化してしまっているのが分かる。</p> <p>また、絵嶋の死去の届は江戸城に出されたが、3日後にやっと手紙で検視役が明日出発すると知らせている。これを見ると、処置をした幕府の方は昔の話、これに対し高遠藩は前例がないので粗相があってはならないという態度が文面からも伺える。ともかく絵嶋の死去について感傷的な文言が全くないのが不思議である。</p> <p>考えてみれば絵嶋生嶋事件の真相もよく分からないのに関係者の処分は重い。幕府にすれば既に過去の話としてさりげなく終わりにしたい、高遠藩としては触らぬ神に祟りなしという対応で乗り切るしかなかったのではないかと思われる。</p> <p>それにしても世間に知られることなく高遠で孤独な生活を送った絵嶋の一生には同情せざるを得ない。</p>		
次回予定	平成26年8月14日 10:00～12:00	於: 金沢公会堂3号室	
	第一学習 宿村布川家文書⑧		